

マレーシア資料収集会議に参加して

本 岡 武

東南アジア史の大家として有名なシンガポール大学 K. G. Tregonning 教授から、猪木正道教授に、マレーシア資料収集会議 (Conference on the Acquisition of Malaysian Materials) へ、京大東南アジア研究センターから誰か代表を派遣しないかとの申し入れがあった。幸に、バンコクにわたくしが滞在しているので、この好意に応ずることとした。

会議のはじまる前日の11月5日、バンコクからクアラ・ Lumpur とよぶ。その間、約 1,200km。コメント・4 という、やや旧式のジェット旅客機で2時間たらずの距離だ。

ジャングル・ゴム園・スズ鉱のまっただなか、人家ひとつ見あたらないところに、この9月1日開場したばかりのクアラ・ Lumpur 新国際空港がある。すばらしく大きな規模で、マレーシアの抱負と経済力を象徴しているようだ。この空港から市の中心までは約 25km。ゴム園の間をぬって手入れのよい道が通じている。道路はこます、樹木は多く、地形は起伏し、しかも空気はさわやか。バンコクとは、たいへんな違いだ。マーリン・ホテルに投宿する。

翌11月6日午前9時半に開会。この会議はマレーシア図書館協会 (Persatuan Perpustakaan Malaysia) の主催で、会場は Dewan Bahasa dan Pustaka。デワン・バハサというと、クアラ・ Lumpur では誰でも知っているようで、教育省の言語文芸局 (Language and Literary Agency, Ministry of Education) のホールである。この局は、マレー語文献・辞書あるいは翻訳を刊行、マレー語研究やマレーシアのマレー語化運動を担当している。このホールはなかに出版部や図書室もある新しい6階建、壁画はなかなかおもしろい。(写真1参照)

本会議の議長であり、また本会議を主催

しているマレーシア図書館協会会長であるデワン・バハサ図書館長 Syed Ahmad bin Ali 氏が開会の挨拶をのべ、ついで祝辞として、文化・青年・スポーツ担当次官 Dato' Engku Mohsein bin Abdul Kadir (このポストは総理大臣に直属すること) が、マレーシア文献収集整備の必要を強調した。この開会演説をした2人は写真のようにまだ若いマレー人だ。しかも、かれらは、まずマレー語で演説し、同じことを英語でくりかえす。開会早早いかにも、マレーシアらしいことが、印象づけられた。(写真2参照)

つづいて第一セッションがはじまる。テーマは、the acquisition of retrospective and current non-Government Malaysian materials with special reference to Malaya and Singapore。座長は、マラヤ大学のとなりにそびえている Language Institute の Senior Lecturer で同時に図書館長である Abdul Rashid bin Ismail 氏、報告者はシンガポール大学の図書館次長 Isobel Andrews 女史。きれいな中年のイギリス人だ。彼女のペーパーは、セッションの主題とは少しはなれ、現在マレーシアの図書館としての資料収集上の、つぎのような問題点を指

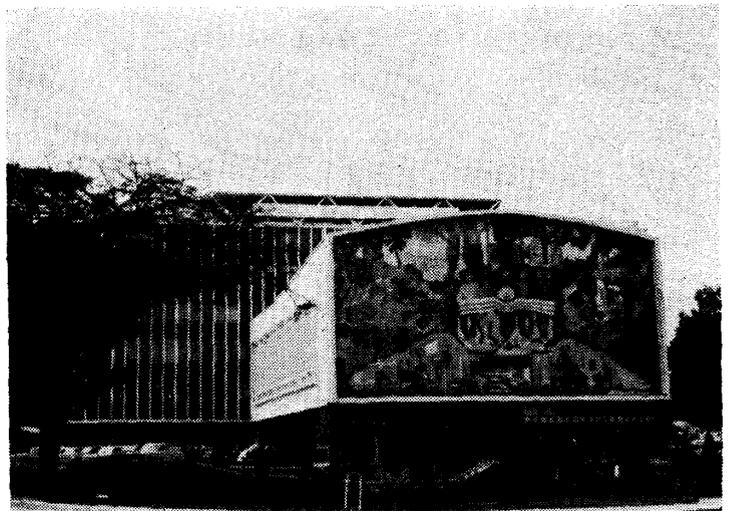


写真1 会場のクアラ・ Lumpur のデワン・バハサ



写真2 開会演説をする Syed Ahmad bin Ali 議長。左に坐っているのは祝辞を述べる Dato' Engku Mohsein bin Abdul Kadir 文化・青年・スポーツ担当次官。

摘した。(1) 新刊の商業出版物を図書館が小売商をとおして入手するという、普通の方法では、なかなか入手できない。情報不足(たとえば National Bibliography のないこと)も一因だが、小売商間の競争が激しく、小売利潤が少ないから、小売商にとっては現金販売しかひきあわない。しかも、公共機関は購入のさい割引きを要求し、小売商側のほうは、なんら組織されていない。(2) 古本の入手が、マレーシアでは、ひじょうにむずかしい。むしろ、イギリス・アメリカの古書籍商で入手されなければならない。とくに、古本価格が暴騰していることに注意すべきだ。(3) Ephemera-background material (短命な基礎資料、たとえば物価報告)は、現在まったく収集保存されていないが、基本資料として収集保存されるべきだ。(4) 新聞は、できるだけ収集し、マイクロ・フィルムにとっておくべきである。(5) 現在、シンガポールの3図書館(シンガポール大学・南洋大学・国立図書館)とクアラ・ Lumpur の1図書館(マラヤ大学)、この4つの図書館でマレーシアおよび東南アジア関係文献の共

同研究が開始されたが、マレーシアなりシンガポールなりの図書館の蔵書目録ができていないので、ゼロックスの利用さえできない。4図書館共同の予備調査が緊急に必要とされる。

ついで、図書の輸入・小売商を代表して、シンガポールの Educational Book Centre, Ltd. の Lu Hon Shing (阮漢盛) 董事經理が、業者側の意見を簡単にのべた。人口が1,000万人のシンガポール・マレーシアで、取扱い書籍が英語・中国語・マレー語にわかれるから、取扱い部数がどうしても少なくなる。それにもかかわらず、Andrews 女史が指摘されたように、公共機関は高い割引率を要求し、他方、小売商の間の競争は激烈で、書店経営はひじょうに苦しいという。

このあとのディスカッションでは、出版業者がカタログを作成すること、そのための出版業者間の共同、また図書館・出版業者・小売商間の連絡を緊密にすることの必要などが提唱された。

午後は第2セッションで、テーマは the acquisition of retrospective and current government publication and archival materials : plans for a current national bibliography. シンガポール国立図書館の館長 Hedwig Anuar 夫人(インド人)が座長となり、報告者は UNESCO から派遣されているマレーシア国立文書館の館長 F. R. J. Verhoeven 博士(オランダ人)。かれはインドネシアの文書館に多年在勤し、その経験がかわれて一昨年クアラ・ Lumpur に派遣されている文書館専門家。まず、文書館と図書館との違いから説きおこし、マレーシアでは歴史的文書がほとんど散逸してしまって、資料的空白時代の多いこと、したがっていかに文書館がたいせつだかを強調する。マラヤ連邦は独立直後の1957年12月に Archives Department を設け、ついでクアラ・ Lumpur 西郊 Petaling Jaya にある Government offices ビルの3階に国立文書館を設け、さらにこのたび Records Management Centre の建物が竣工した経過を報告する。こんご、マレーシアでは政府の全文書がこの Records Management Centre に送られ、その約1/5が国立文書館で永久保存されることになるというのだから、すばらしい計画だ。博士は、マレーシアが英領植民地であった関係上、政府刊行物が多く、かつすぐれているにもかかわらず、現在の文書

館では、この政府刊行物が保存されていないことを遺憾とされた。これは、マレーシア関係の研究者としても、まことに残念に思われるところだ。シンガポールの国立図書館は政府刊行物を主、政府文書を従としているのにたいし、クアラ・ Lumpur の文書館はその逆であることも指摘された。

これにたいする質疑応答としては、National Bibliography の刊行、クアラ・ Lumpur における国立図書館の設立の必要が強調された。この報告で指摘されたように、マレーシアの英領当時の政府刊行物のリストが作成されていないことは、マレーシア研究上、ひじょうな難点である。歴史研究者にとっては政府その他の文書が不可欠であるように、自然科学や社会科学の研究者にとってなにより役立つのは、実は100年にわたってのぼう大な政府刊行物なのである。

なお、国立文書館については、いずれも政府刊行物であるが、Haji Abdul Mubin Sheppard, *Report on the Public Records Office and National Archives of Federation of Malaya (1958-1962)* と Director of National Archives, *Annual Report on the National Archives of Malaysia, 1963* とが、参考になる。

第2日の7日午前は第3セッションで、the acquisition of retrospective and current Sabah and Sarawak materials をテーマとする。座長は本会議の議長である Syed Ahmad bin Ali 氏、報告者は Kuching (Sarawak) 公立図書館の Lucien de Silva 館長。かれは、セイロン人。30才をでたばかり、短軀だが元気いっぱいという感じ。ペーパーは、すばらしくよく準備され、文字どおり、Sarawak と Sabah 研究の主要文献を、あますところなく紹介し、みごとなものだった。かれは、まず Sabah と Sarawak の両地域を報告すべきだが、どうしても Sarawak が中心となることをことわる。そして、これまで出版された Sarawak 研究上の主要市販文献だけでなく、政府刊行物・Sarawak 博物館刊行物・新聞・Borneo Literature Bureau 刊行物などを要領よく紹介した。最後に、近刊の Peter Goullart, *River of the White Lily*, John Murray, London および M. G. Dickson, *A Sarawak Anthology*, University of London Press の2冊をまで紹介するほど、至れりつくせりだった。

ペーパーのほかには、Sabah and Sarawak Materials

および Government Publications (Sarawak) 一覧表のミメオグラフ、また希望者には Geological Survey, Borneo Region, Malaysia (Reprint from *Borneo Region, Malaysia, Geological Survey, Annual Report, 1964*) も配布されたが、この一覧表は、Sabah・Sarawak 研究上、報告のペーパーとあいならんで、きわめて貴重なものと思われる。

質疑応答のさい、マレーシア連邦として Sabah・Sarawak の研究をすすめることが重要であり、そのために文献リストの作成の必要が強調された。また、Sabah と Sarawak との間が、なにかにつけ連絡なり協力なりの不十分だという実態が指摘されたのは興味深かった。

午後は、最後の第4セッションで、東南アジア関係文献収集の世界的第一人者、アメリカ国会図書館東南アジア部長、Cecil Hobbs 氏の the international angle on the acquisition of Malaysian materials と題しての報告。座長は、シンガポール大学の図書館長 Jean Weller 女史（イギリス人）。(写真3参照)



写真3 報告する Cecil Hobbs アメリカ国会図書館東南アジア部長。座長はシンガポール大学図書館長 Jean Weller 女史。

わたくしは、Hobbs 部長には、1961年5月、東南アジア研究計画のため臼井二尚教授・棚瀬襄爾助教授とワシントン国会図書館を訪問したとき会ったことがある。そのときのことをいうと、この茶目気たっぷりの小柄の老アメリカ人いわく、「なにか自分がお役にたちましたかしら」と。

かれは報告となると、まるで人がちがったように、「われわれはひとつの世界に住んでいるのだ。正確な信頼しうるコミュニケーションこそ世界の平和の基礎である。このコミュニケーションにおいて文献収集のはたす役割がいかに大きいか」と、ひじょうにあっっぱい調子で説きおこす。ついで、アメリカの国会図書館で、それまでほとんど注意されていなかった東南アジア関係文献を、1947年に、自分が責任者となって収集を開始した。そのため、広く東南アジアをくりかえして旅行し、商業出版物はもちろんのこと、新聞・雑誌・政府刊行物など、東南アジア文献をあらゆる角度から集めた。現在国会図書館の Southeast Asia Catalogue は、subject catalogue で国別になっているが、カードは約80万枚ある。この東南アジアを国別にみて、ビルマ・フィリピン・インドネシアは比較的良好に整理されているが、マレーシアについては、まだまだ不十分である。Malaysian Bibliography, Malaysian Periodicals Index が作成されなければならない。またマレー語出版物の翻訳プロジェクトも考慮されるべきだという。最後に国際理解こそ世界平和の道だと、改めて強調するのであった。

質疑応答としては、とくに Malaysian Periodicals Index 刊行と、図書館学校設立の必要がとかれた。Hobbs 部長は、東南アジアの図書館をくりかえし歴訪されたためだろうが、参加者ときわめて懇意の間がらのようだ。かれの学識と努力とにたいし、一同から深い尊敬の念が払われている。この空気はわたくしには気持ちがよかった。

最後に Syed Ahmad bin Ali 議長がたって、2日間にわたる会議全体をたくみに要約し、これらのペーパーがきわめて価値あると思われるので、Journal of Malay-

sian Library Association の本年12月号に全ペーパーを掲載して Proceeding とすることを約束した。

(この会議のこまかい報告に興味をもたれるかたは、Tuan Syed Ahmad bin Ali, Librarian, Dewan Bahasa dan Pustaka, Kuala Lumpur, Malaysia に申しいでられたら、この Proceeding が手にはいることと思われる。)

会議のおわった翌8日、わたくしはマラヤ大学図書館とマレーシア文書館とを訪問した。マラヤ大学は図書館をふくめ全施設の立派なことが有名で、ここにとくに報告する必要もなからう。わたくしが感心し、またとくに報告しておきたいのは、Government Offices のなかにある National Archives もそうだが、それ以上に、そこから約500mばかり離れたところにある Records Management Centre についてである。この建物はほとんど完成したところで、まだセンターとしての機能は動いてはいないが、これはこういったスクリーニングのための施設として、おどろくべく完備されたものだ。案内していただいた Verhoeven 館長は、「日本はあまり文書館に熱意はありませんね」と、ちょっと皮肉っていたが。(写真4参照)

ついで9日は、日本大使館、フォード財団クアラ・ Lumpur 事務所、国立博物館などを訪問、また新設の国立モスクや国立動物園を見学したが、この国立の (Negara) の諸施設は、まさしく新興国マレーシア

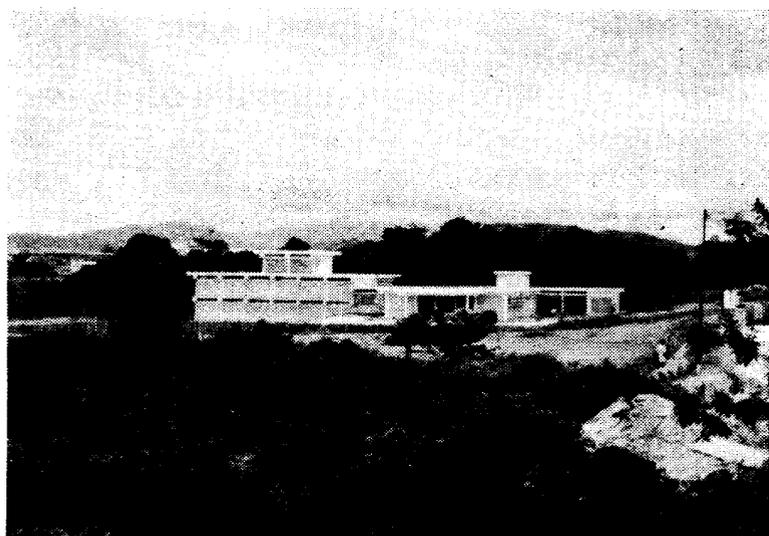


写真4 Petaling Jaya にある新築の Records Management Centre より National Archives を眺める。

の誇りであるようである。10日予定どおりバンコクに帰任した。

会議に出席して、いろいろ教えられるところが多かった。とりわけ、これがきちんと時間どおり運営され、それぞれ報告者がよく準備してきているのは、まさにみごとな組織だという一言につきる。マレーシア文献収集のためのこのような会議が催されたことは、国立文書館の設立とともに、新興国マレーシアの誇りたかき希望の所産といえよう。もちろん、それをささえるだけの高い経済能力と行政能力とが看過されてはならない。わたくしは、いまさらながら、マレーシアを見なおす気持ちになったのであった。

また、この会議の出席者約60名前後のうち、女性が半分近くを占めていた。数だけでなく、質的にいっても、シンガポール大学図書館やシンガポール国立図書館の館長はいずれも女性である。日本とはうんと違うのだ。

さらに、外国からの出席者は、Hobbs 部長, Sir Allen およびわたくしの3人だけだから、これはまったくの国内会議である。にもかかわらず、人種的には、マレー人・インド人・セイロン人・中国人・イギリス人・オランダ人・アメリカ人など、きわめてcommunalな会議であった。しかも、正式の開会の辞はマレー語で述べられたが、その他はいっさい英語。英語には誰もがなにのわずらわしさも感じないようだった。まさに、マレーシアの特質が、この会議にもまざまざとあらわれていた。

もうひとつマレーシアの特質の反映と思われたのは、去る8月のマレーシアからのシンガポール脱退がこの会議におよぼした影響である。ところが、この会議では、ぜんぜんその影響がみられない。全出席者の1/3近くはシンガポールからだったが、シンガポールとクアラ・ Lumpur との協力がたえず強調された。こうしたことは、まさしくマレーシアとシンガポールとの関係のひとつの面ではなかろうか。

ここに、マレーシアの主要文献機関と、その責任者名をあげておく。

- (1) Library, University of Malaya, Assistant Librarian, Mr. D. E. K. Wijasuriya
- (2) Library, University of Singapore, Librarian, Miss Jean Waller
- (3) National Library of Singapore, Librarian, Mrs. Hedwig Anuar
- (4) National Archives of Malaysia, Director, Dr. E. R. J. Verhoeven
- (5) Dewan Bahasa dan Pustaka, Librarian, Tuan Syed Ahmad bin Ali
- (6) Kuching Public Library, Librarian, Mr. Lucien de Silva

なおシンガポールの南洋大学図書館からは若い館員が出席していた。とくに華僑関係文献として重要なようだが、京大人文学研究所日比野助教授の報告に詳しいので、ここでは省かせていただく。(日比野丈夫、マラヤ調査旅行覚え書、東南アジア研究第3号、昭和39年3月所収)

最後に、マレーシアにおいて出版活動が活発になってきている事実を指摘しておきたい。Malaysia Sociological Research Institute の出版物も興味あるが、Kuala Lumpur の Oxford University Press から目下刊行あるいは印刷中の Oxford in Asia Historical Reprints としての、

Lennox A. Mills, *British Malaya 1824-1867*

Stamford Raffles, *The History of Java*

Henri Mouhot, *Mouhot's Diary*

John Cameron, *Our Tropical Possessions in Malayan India*

William R. Roff, *Stories by Sir Hugh Clifford* などは、きわめて重要なリプリントである。

こうした短時日の旅行として十分効果あげたことにつき、マレーシア図書館協会の諸賢に謝意を表す。また、甲斐大使をはじめとする在マレーシア日本大使館の方方や、クアラ・ Lumpur 駐在のアジア経済研究所萩原宣之氏の御歓待にたいし、心からお礼をもうしたい。(1965年11月16日、バンコクにて)